

第一節 環境の変化と縄文文化の成立

一 縄文時代概説

現在よりも気温がおよそ七度低かったとされる寒冷期が緩み始めるのは、今から二万年前頃である。これに伴い、植生は針葉樹主体から落葉広葉樹や照葉樹主体の森となり、動物相もナウマンゾウやオオツノジカといった大型哺乳類が絶滅し、

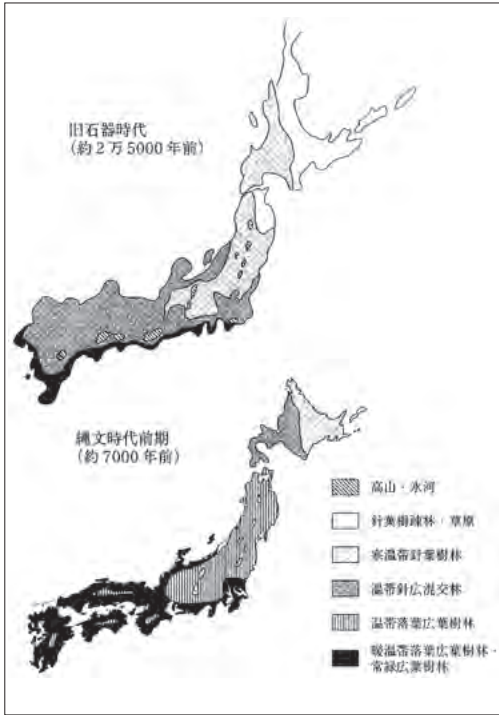


図2-1 約25,000年前と約7,000年前の日本列島の植生帯の比較
(辻(2002)「列島の環境史」より)

イノシシやシカなどの中型哺乳類が主体となった。また、最も大きな変化が起こったのは、海水準である。最終氷期最盛期には高緯度地域を中心に氷河が発達し、海水準も現在より一二〇メートルほど低下していたが、二万年前以降気温の上昇に伴って氷河がとけて海に流れ込み、徐々に海水準が上昇し、約六〇〇〇年前頃にはほぼ現在の海水準まで上昇したことが分かっている(図2-1)。このような、更新世から完新世へと大きく変化する環境に適応する形で始まったのが、縄文時代である。

二 縄文時代の特徴

縄文時代と旧石器時代は、考古学では土器の出現をもって画される。日本においては、土器は深鉢として出現し、その後も主体を占めるが、深鉢には煤や吹きこぼれの痕を残すものがあることから、煮炊き用の道具として開発されたことが分かる。土器の出現により、硬い食べものを煮炊きすることで柔らかく食べやすくなることができるようになり、高齢者や幼児などでも十分咀嚼して食べることを可能にした。また、煮沸によりアク抜き効果が期待でき、旧石器時代に比べて可食植物が格段に増加したことが推測される。このように、土器の発明は、それまでの暮らしを一変させ、長寿命化や人口増加をもたらしたと考えられている。

また、温暖化に伴って本州や九州では森の植生が針葉樹主体から落葉広葉樹や照葉樹主体に変化したことにより、森林で容易に採取可能なクリやドングリをはじめとする堅果類が主食として利用された。また、四季の変化が明確になり、食糧を求めて移動を繰り返す生活スタイルから、一カ所に定住して季節ごとに変化する資源を網羅的に利用して食料をまかない、石材などの必要物資は交易により入手するようになった。これにより、恒常的な施設である竪穴住居や墓地、持ち運びに不便な大型の土器、石皿等の大型石器が遺跡に残されることとなった。

季節毎の資源量の変動が大きい中で定住生活を送る上で欠かせないのが、食糧の貯蔵技術である。特に冬場は食糧が不足する時期であるが、縄文人は秋に収穫した堅果類を、水場付近に穴を掘って水漬けにしたり、住居内の上屋に乾燥保存する形で貯蔵し、冬場における食糧源とすることで、定住を可能にしたと考えられている。

一方、植生の変化に伴ってオオツノジカやナウマンゾウなどの大型哺乳類が絶滅し、代わってイノシシやシカなどの中小型哺乳類が主体となった。このような動物相の変化に対応して、旧石器時代までのヤリを主体とする狩猟具から、石鏃に代表される弓矢へと道具が一変した。また、海域の拡大に伴って海産資源の本格的な利用が始まり、釣針などの骨角器が発達するほか、沿岸部では貝塚が形成された。

このように、縄文時代の生業は、狩猟・漁労・採集を主体とし、それぞれ様々な道具が利用されたことで多種多様な石

器や骨角器、木器が作られた。なお、縄文時代の後半には、ダイズ・アズキなどのマメ類や、イネなどの栽培が行われた可能性が近年指摘されている。

自然環境に高度に適応した縄文人にとって、自然は恩恵を被るだけでなく、時として脅威を与える存在でもあった。そのため、自然に祈りをささげる呪術的な精神遺物が発達するのも縄文時代の大きな特徴である。これらには、妊婦を模した土偶や石棒・石刀などがあり、主として東北・関東を中心とする東日本で発達した遺物であるが、縄文時代晩期には西日本から九州まで波及することが分かっている。

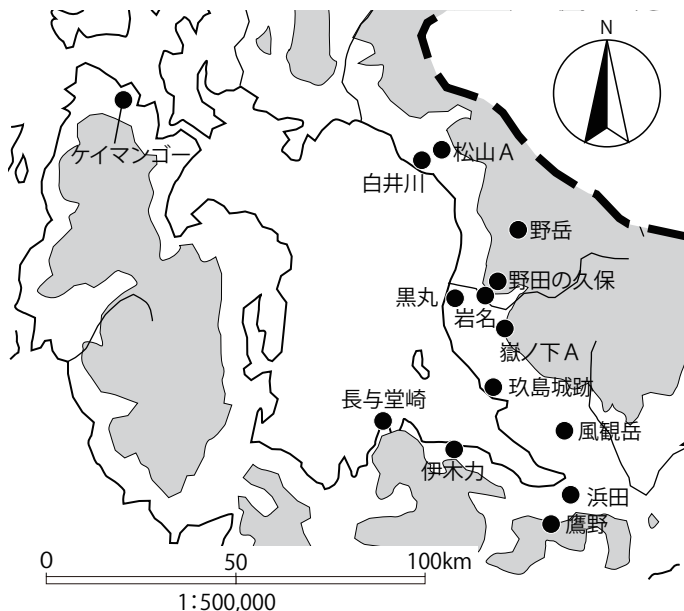
三 縄文時代の時期区分

縄文時代の土器、すなわち縄文土器は、有名な火焰土器に代表されるように、粘土紐を器面に張り付けたリ、縄紐を転がしたり、沈線、刻みといった手法を凝らして、様々な文様を描く点に特徴がある。これらの文様や器形の違い、出土する堆積層の上下関係等に着目して整理した、土器の相対的な新旧関係のことを土器編年と呼び、考古学では相対的な年代の指標として重視している。日本全国の縄文土器編年の骨格を整備した山内清男は、縄文時代を草創期、早期、前期、中期、後期、晩期の六期に区分した^①。本稿では、考古学史上に長く活用されてきた六期区分を用いて時系列に沿った記述をするが、大村湾沿岸における縄文時代の画期を意識した説明も積極的に加えていく。

四 対象地域における縄文時代遺跡

本稿で対象とする地域は、縄文時代が列島内の多様な自然環境に適応した時代であることを考慮し、環大村湾岸地域を対象とする。そのため、現在の行政区分では、大村市のほか、川棚町、東彼杵町、諫早市や西海市、佐世保市の一部も対象とすることを、あらかじめ断わっておく。

長崎県教育委員会『長崎県遺跡地図』（一九九四）によれば、大村市内には一〇九カ所の縄文時代の遺跡が存在する。こ



遺跡名	所在地	時期	特徴
ケイマンゴ	西海市	縄文晩期	黒川式期の埋壘1基を検出。
松山A	東彼杵町	縄文早期	無文土器に伴って集石遺構6基検出。
白井川遺跡	東彼杵町	縄文晩期～弥生早期	刻目突帯文土器に伴って、安山岩製扁平打製石斧が90点出土。
野岳遺跡	大村市	縄文草創期	細石刃核多数採集されている。
野田の久保	大村市	縄文晩期	孔列文土器出土。
岩名遺跡	大村市	縄文早期・晩期	黒川式土器及び扁平打製石斧がまとまって出土。
黒丸	大村市	縄文後期末～弥生中期	黒川式から刻目突帯文期の遺物がまとまって出土。堅穴遺構1基、低温地型貯蔵穴60基、埋壘などを検出。
嶽ノ下A	大村市	後期末	円形の堅穴状遺構2基検出。
玖島城跡	大村市	縄文早期末～前期	条痕文土器に伴う貯蔵穴検出。
風観岳支石墓群	諫早市 大村市	弥生早期～前期	石棺と土坑を内部主体とする支石墓を100基以上検出。
下峰原	諫早市	縄文晩期	黒川式の埋壘検出。
浜田	諫早市	縄文前期	曽細式土器とともに硃石出土。
鷹野	諫早市	縄文早期	押型文土器・条痕文土器に伴って、集石遺構25基、炉穴30基検出。礫は被熱を受けている。
伊木力	諫早市	縄文前期～晩期	前期及び後期の貯蔵穴や前期の丸木舟検出。前期から後晩期にかけての遺物が大量に出土。
長与堂崎	長与町	縄文草創期	細石刃核出土。

図2-2 大村湾沿岸主要遺跡分布図(縄文時代)

のうち、本書で引用する代表的な遺跡の位置図と概要を図1-2に示した。逐次参照されたい。

(中尾篤志)

註

① 山内清男「縄紋土器型式の細別と大別」『先史考古学』一一一 先史考古学会 一九三七

山内清男「縄紋草創期の諸問題」MUSEUM第224号 日本考古展特集別刷 東京国立博物館 一九六九

第二節 旧石器時代から縄文時代へ

一 氷河期の終焉と環境変化への適応

日本に土器が発生した約一万三〇〇〇年前頃、海面は約マイナス五〇メートルほどの水準であり、九州本土と五島列島の間が分断されたのはこの頃である。西彼杵半島の西側に広く展開していた平野は後退して著しくその面積を減じた。また世界的にみてこの時期には、二回の寒冷なドリアス期などを織り込みながら、全体としては温暖化が進行した時期である。

気候の温暖化は、植生の変化をもたらした。最終氷期最寒冷期の長崎県地方には、マツ属・ツガ属・クルミ属・ハンノキ属・ブナ属など冷温帯落葉広葉樹林が広がっていたことが、平戸市堤西牟田遺跡の花粉分析資料によって確認されている①。現在の宮城県仙台市あたりの植生と近いようである。こうした寒冷な植生も、温暖化の進行により縄文時代草創期以降には変化し始め、長崎県地方の大部分は対馬暖流の影響を受けて、シイ・カシなどの堅果類を供給する照葉樹林が広がるようになった。その景観は現在の里山に広がる植生と同じようなものであったと思われる。

二 長崎県における土器発生の様子

長崎県は、縄文土器の起源問題に深く関わっている。昭和三十五～四十年（一九六〇～一九六五）にかけて、三次にわたって吉井町（現佐世保市）福井洞穴の発掘調査が実施された。第一次調査において当時旧石器時代の所産と考えられていた

細石器と爪形文土器、隆線文土器が共伴して出土した。このとき芹澤長介・鎌木義昌の間で論争があったといわれる。つまり爪形文土器と細石器の共伴を認めるかどうかという問題で、芹澤は両者を混在と考え、鎌木は積極的に共伴と理解した。その結果は出土状態を仔細に観察して共伴を認めることで決着した。細石器は、旧石器時代最終末の石器とされてきたが、福井洞穴で初めて土器と共伴することが明らかになったのである。隆線文土器は、旧石器時代的な細石器と伴ったことや、放射性炭素年代で一万二七八〇年±七八〇年前と計測されたことなどから、当時世界最古の土器という評価が与えられた②。

隆線文土器・爪形文土器と細石器の共伴は、一人九州地方においてのみ認められる現象である。九州地方以外では隆線文土器に伴う石器は、有舌尖頭器や石鏃といった縄文時代的な石器群である。こうした九州地方にみられる細石器と土器が共伴する状況を岡本東三は「続細石器文化」と呼んで九州地方の後進性を主張した③。

福井洞穴の調査から一〇年後の昭和四十八年(一九七三)、佐世保市泉福寺洞穴で隆線文土器の下層から、豆粒の文様をつけた豆粒文土器が発見され、土器の起源は更にさかのぼった。また爪形文土器の上層の押引文土器にも細石器が伴うことも確認された。つまり、細石器と共伴する土器が前後にそれぞれ一段階付け加えられることになった④。

細石器と土器が共伴する遺跡は着実に増加している。佐世保市宇久町の城ヶ岳平子遺跡、五島市の茶園遺跡Ⅳ層、雲仙市の小ヶ倉A遺跡などである。これらの遺跡は、細石器と土器の共伴例を増やすとともに、開地遺跡での共伴という点でも評価すべきものである。



写真2-1 豆粒文土器

(佐世保市教育委員会提供)

③ 長崎県の縄文時代草創期石器群

長崎県の草創期の編年は、泉福寺洞穴の層位的成果を基準にする。泉福寺洞穴では下層から豆粒文土器↓隆線文土器↓爪形文土器↓押引文土器↓条痕文土器という土器変遷が確認されており、福井洞穴・直谷岩陰など他の草創期の遺跡とも整合的である。これらの土器に伴う石器群は、豆粒文土器から押引文土器までは細石刃石器群が、条痕文土器には石鏃が伴う。泉福寺洞穴では隆線文土器段階（砂層）と爪形文土器段階（シルト層）の間が不整合になっており、ここをもって草創期前半・後半に区分する。

草創期前半（豆粒文土器・隆線文土器段階）の細石刃石器群は、西海技法による福井型細石刃核に代表される。プランクと呼ばれる両面加工の母形を横長に用いるもので、打面調整は横打調整を基本とするが小口から長軸方向にスポールを取るものもみられる。また泉福寺洞穴一〇層類型と呼ばれる細石刃剥離作業面を両端に有するもの⑤や泉福寺洞穴八層類型のように長めの細石刃を生産する縦長の細石刃核など特徴的なものも存在する⑥。前半段階では、縄文的な石器である石槍や石鏃は組成されない。

草創期後半（爪形文土器・押引文土器段階）の石器群は、狩猟具の主体は依然として細石刃石器群であるが、石槍・石鏃といった縄文文化を代表する石器も伴うようになる。泉福寺洞穴六層（爪形文土器）では細石刃石器群と木葉形の石槍が伴っている。五島市岐宿町の茶園遺跡IV層では、細石刃石器群に木葉形の石槍・石鏃及び局部磨製石斧が伴っている。平戸市田崎遺跡でも細石器と石鏃が共伴している。このようにいくつかの遺跡で細石器と石槍・石鏃の共伴が確認されるが、狩猟具の主体はあくまで細石器であり、茶園遺跡を除けば石槍や石鏃は客体的な存在である⑦。

石槍や局部磨製石斧の出自や系譜については、東方からの神子柴石器群の影響（神子柴インパクト）とみる岡本東三らの意見もある⑧が事態はそう単純ではない。

四 大村湾東岸の遺跡

大村市玖島崎遺跡の細石刃核(図2-13)は、井手寿謙が採集した資料で、長崎県で最も早く報告された楔形細石刃核である(9)。現在は東彼杵町歴史民俗資料館に展示されている。腰岳・牟田系と思われる良質の漆黒黒曜石を素材とする。側面観はD字形を呈し、下縁・背縁には鱗状の細調整が丁寧な施される。打面は、細石刃剥離作業面側からの長軸スポールの剥出による単打面で形成され、打面調整はみられない。全体的な印象から泉福寺洞穴一一層の細石刃核に類似する典型的な福井型である。

松山A遺跡から細石刃核が二点出土している。一点は打面に横打調整のみられる福井型である。もう一点は縦長が特徴的な石ケ元型であり、打面は細石刃剥離作業面側からの剥離による。両者とも背縁の鱗状調整は丁寧である。石材はともに腰岳・牟田系黒曜石が用いられている。編年的な位置としては、福井型と石ケ元型の両者が共伴することや「神子柴型」の石斧が伴うことから草創期の後半に位置づけられる。

五 大村湾南岸の草創期の石器群

諫早市鷹野遺跡から福井型細石刃核が二点、そのブランクが一点出土している(図2-4の13)。いずれも側面調整は粗く、背縁の鱗状細調整もほとんどみられない。打面は小口から単打面である。ブランクも併せて複雑な側面調整であることからみて泉福寺洞穴・福井洞穴などの細石刃文化中心域から離れた周辺地域の福井型の簡略化した姿とみるか、若しくは細石刃石器群の最終末期とするか判断に迷うところであるが、後者の考えを支持したい。

西輪久道遺跡の石器群は、他遺跡と若干様相を異にする。この時期のものと思われる細石刃核は二種類ある。黒曜石の平たい板状剥片を使用するもの(図2-4の45)は、両側面の調整はほとんどみられず主要剥離面を大きく保持している。も

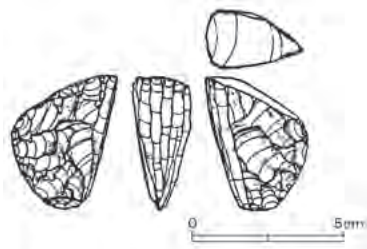


図2-3 玖島崎遺跡の細石刃核

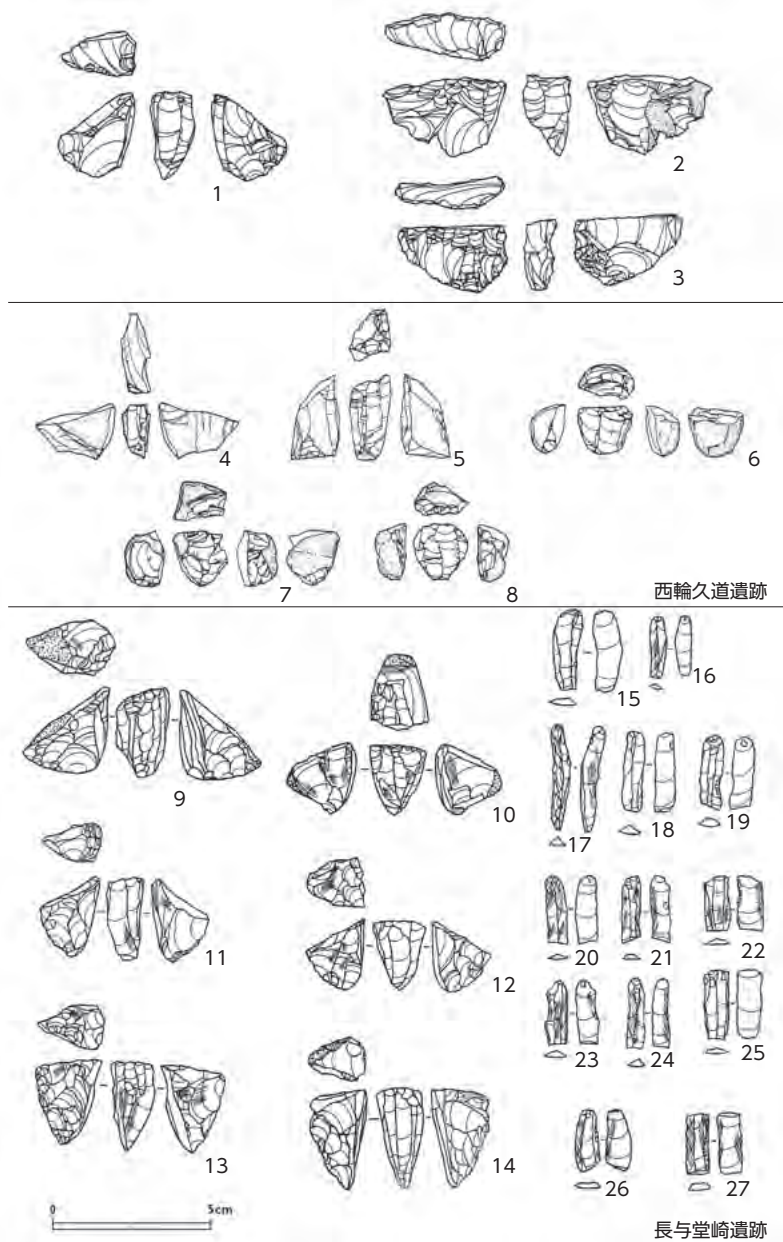


図2-4 大村湾南岸の細石器

う一例(図2-4の6)が更に特異である。径^二センチ前後の灰白色黒曜石の小円礫を素材とする。灰白色の強い半透明の黒曜石は、その色調からすれば古里系と思われるが産状が異なる。とすれば新しい原産地開発に及んだか若しくは古里の中でもそれまでは選択されなかった小円礫に石材選択の幅を広げたかのいずれかの解釈が可能であろう。こうしたあり方は百
花台皿層、城ヶ岳平子遺跡などと共通する現象である。

長与町の長与堂崎遺跡でも多くの細石刃核が出土している(図2-4の9)~(14)。基本的には福井型(図2-4の9)~(12)及び石ヶ元型(図2-4の13)~(14)を基調とする。福井型は、細石刃剥離作業面の幅が広いものが多く、打面は長軸スポールによるものと横打調整によるものがある。打面に礫面を残す場合もある。下縁調整は雑で、鱗状の調整を施すものは少ない。その要因としては、拠点遺跡から距離的に離れた地域にみられる西海技法の簡略化現象と理解することもできるが(10)、素材となる黒曜石が小礫を選択したため器体の一部に礫面を残すものがあるなど石材環境に影響されたことも一因として挙げられる。この地域で出土する石ヶ元型は細石刃剥離作業面が縦長になるもので、佐賀県唐津市上場台地にある石ヶ元遺跡群の資料を標式とするもので、主に佐賀県から長崎県松浦市・平戸市を中心に分布する。鹿児島県建山遺跡の例を除くと本遺跡例は分布の南限を示すものである。

六 「神子柴」的石器文化の出現

神子柴文化は、長者久保・神子柴文化ともいわれ、東北日本を中心に分布し、旧石器時代から縄文時代草創期への移行期に位置づけられる。石槍と局部磨製石斧それに石刃技法を指標とする神子柴文化は、東北地方から中部日本までは確実に存在するが、近畿以西ではその要素は分解しており、セット関係を満たす例はほとんどない。九州地方では大分県市ノ久保遺跡の局部磨製石斧と船野型細石刃核、福井洞穴第四層の石槍と船野型細石刃核の共存関係を東日本からの神子柴文化の波及とみなして積極的に古く位置づける意見が提出され(11)~(12)、支持される傾向にある。そうした中、一九九七年五島市岐宿町茶園遺跡で注目すべき石器群が検出された。茶園IV層では土器と伴って削片系細石刃核、細石刃とともに

に局部磨製石斧や大量の石槍が出土した。その石器群の時期は、草創期後半の爪形文土器・押し文土器段階に位置づけられている(13)。大村湾岸の東彼杵町松山A遺跡でも細石器と局部磨製石斧・石槍が共伴しており、茶園遺跡とほぼ同様の組成をもつことから草創期後半段階とするのが妥当であろう。

■局部磨製石斧

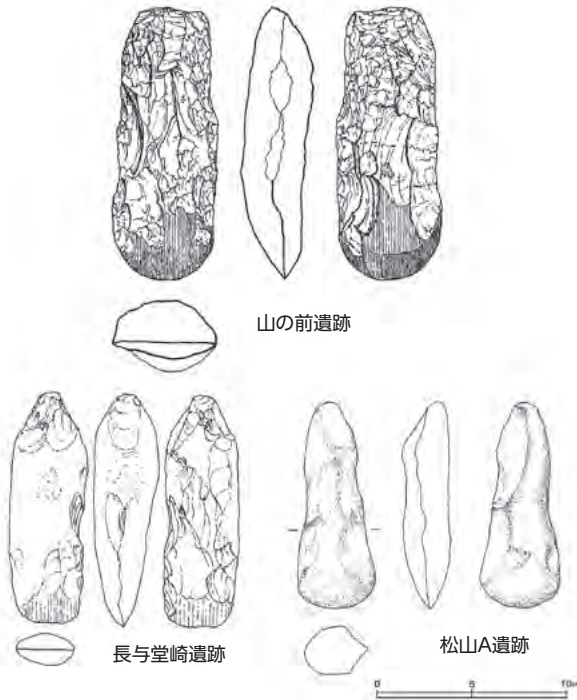


図2-5 「神子柴」型石斧

その形態が、東日本の神子柴型石斧と類似していることから、東日本からの影響とする考え方もあるが、東日本の神子柴型石斧には石刃が伴うなど相違点が多々あり、真性の神子柴文化とは考えられない。東日本からの文化の波及と想定しても神子柴文化の要素が崩れた形で流入したと思われる。ここで「神子柴」と表記する所以は、こうした「神子柴」型石斧の出自が依然として不明であり、自生説、大陸からの波及を含めて検討する必要があるためである。

山の前遺跡は、標高二五三メートル、野岳遺跡から約四〇〇メートルほどの距離に位置し、野岳湖に面している。東野岳町の森キヌエによって一点の局部磨製石斧が採集され、九州歴史資料館の横田義章によって報告されている(14)。長さ一四・四センチメートル、幅五・二センチメートル、厚さ二・四センチメートル

で、硬質で緻密な砂岩系統の石材である。やや甲高になる。刃部は円刃で、丁寧な研磨加工が施されている。

松山A遺跡の石斧は、玄武岩製で風化が著しく稜線は不明瞭である。刃部は恐らく磨製されていたと思われるが風化のため確認できない。甲高で、刃部の形態は円刃である。

長与堂崎遺跡でも一点採集されている。長さ一六・一センチ、幅五・二センチ、厚さ二・三センチで、硬質で緻密な砂岩系統の石材である。刃部は両刃で直線的であり、丁寧な研磨加工が施されている。

七 草創期から早期初頭の石槍

西北九州の草創期石器群の最大の特徴は、細石刃石器群が旧石器時代から継続することであるが、後半段階になるとその細石刃石器群に石槍及び石鏃が伴うようになる。大村湾周辺では細石刃石器群と石鏃の共伴する事例は明らかになつていないが、石槍との共伴は松山A遺跡で確認されている。

松山A遺跡は石槍の生産遺跡としての性格をあわせもつ。九州地方で石槍の生産遺跡として知られているのは佐賀県多久市に所在する三年山遺跡・茶園原遺跡および福井洞穴であるが、これらの遺跡の発掘調査では、石槍の未成品や製作に伴う剥片などが足の踏み場もないほど集中して出土している。

松山A遺跡での石槍製作は、福井洞穴周辺で産出する北松玄武岩と呼ばれるガラス質玄武岩を素材としている。搬入されたその石材を使って石槍を製造した場所であることが、石槍の完成品の量が少ないこと、製作途中での破損品が圧倒的に多いこと、製作時に生じる剥片類が相当数にのぼることなどから推察される。そのあり方は、三年山遺跡・茶園原遺跡や福井洞穴前庭部の様相と類似している。

■石槍の変遷

西北九州の石槍の系譜をみると、旧石器時代末の福井洞穴四層に起源をみる。船野型細石刃核に伴うもので、幅広く分厚く、草創期のそれとは形態的に異なる。このような石槍は大村湾岸では松山A遺跡に一点類例がある。佐世保市教育委

員会が調査した直谷岩陰でも出土しており、放射性炭素年代で一万四〇〇〇年前という結果が出ている。しかしこの種の石槍は土器発生の時点で一端消滅するようである。

縄文時代草創期の前半段階（豆粒文土器・隆線文土器）の泉福寺洞穴・福井洞穴では石槍が組成されていない。福井洞穴四層の石器群とは、細石刃核の形態・製作技術で大きなヒアタスがあり連続性が認められない。集団関係に大きな変化があったことが想定される。

泉福寺洞穴・福井洞穴では隆線文土器と爪形文土器の間が不整合になることが分かっており、その要因としては気候変動が考えられる。寒冷な乾燥した気候のもとで砂層が形成された前半段階から温暖で湿潤な気候の影響でシルト（粘質）土層が形成された後半段階への移行が、石器群に大きな変革をもたらしたことが想定される。西海技法によって製作される細石刃核は横長のものから縦長（石ケ元型）を志向するようになる。ここに至って木葉形の石槍が出現する。しかし狩猟具の主体は依然として細石器であり、石槍はあくまで客体的な存在である。

爪形文土器と石槍の相伴が確認されている遺跡は、泉福寺洞穴六層、茶園遺跡Ⅳ層、宮崎県阿蘇原上遺跡などに限られている。石槍が大量に出土している遺跡は茶園遺跡のみで、他は一ないし数点と僅少な出土にとどまる。またこの時期には平面形が三角になる石鏃も組成され始める。つまり真の意味での「縄文化」が胎動し始める時期といえよう。

大村湾岸では、土器と石槍の相伴した事例はない。この時期の石槍と考えられる資料は、東彼杵町里郷遺跡（図2-16の7）、同町松山A遺跡（図2-16の8、9）から出土している。

石槍は、縄文時代早期（条痕文土器・捺糸文土器・無文土器）に入っても使われ続ける。しかしその形態には変化が現れ、木葉形から柳葉形へ移行し、細身化が進行する。大村湾岸でも同様で、諫早市鷹野遺跡（図2-16の1～3）は先端部がより細身になるもので、大分県一日市洞穴に類似するのがみられる。野田の久保遺跡（図2-16の4～6）からは、6のように基部の両側に抉りが入る松木田型に類似するものがみられる。また図示していないが葛城遺跡でも細身になるものや基部が平基になるものなど数点が出土している。

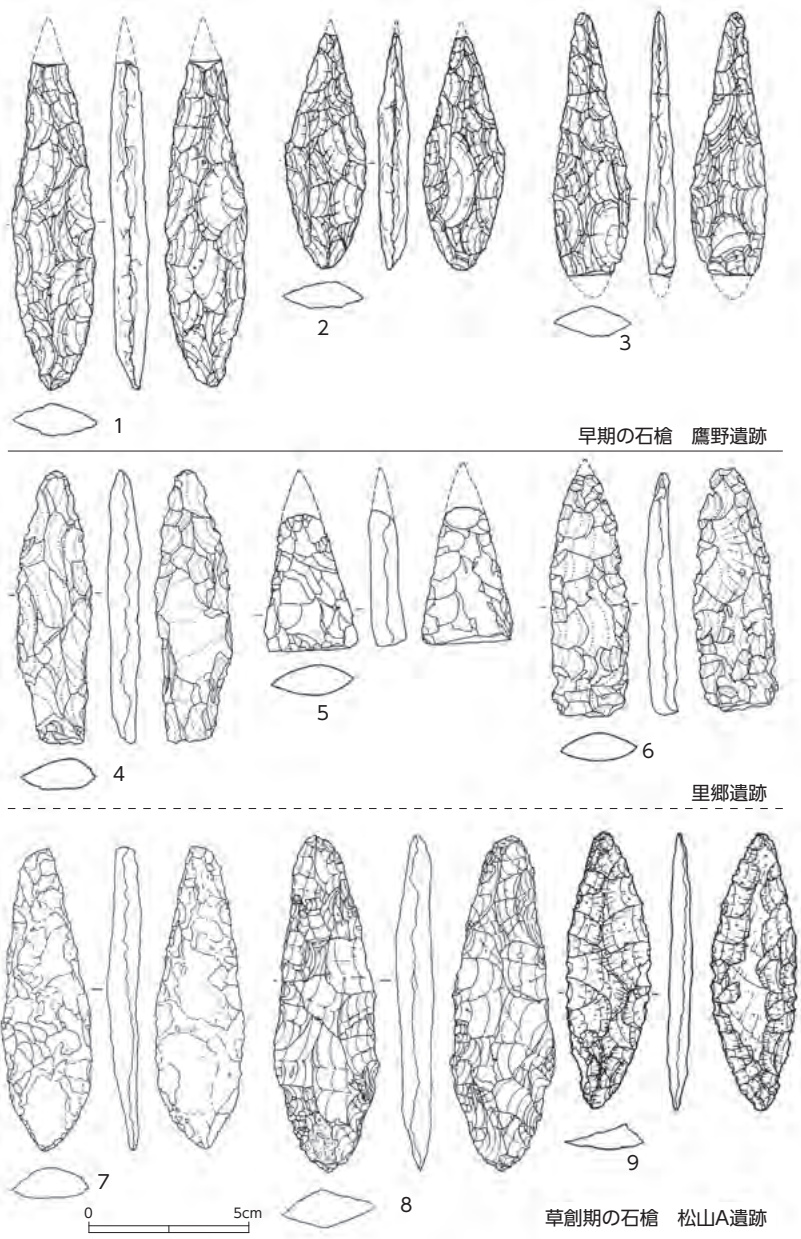


図2-6 大村湾周辺の石槍

註

- ① 萩原博文「第2章 平戸の旧石器時代」『平戸市史 自然・考古編』平戸市 一九九五
- 萩原博文「縄文草創期の細石刃石器群」『日本考古学』第二二号 日本考古学協会 二〇〇一
- ② 鎌木義昌・芹澤長介「長崎県福井岩陰―第一次発掘調査の概要―」『考古学集刊』第3巻第1号 東京考古学会 一九六五
- ③ 岡本東三「九州島の細石器文化と神子柴文化」『泉福寺洞穴研究編』泉福寺洞穴研究編刊行会 二〇〇二
- ④ 麻生 優「泉福寺洞穴の発掘記録―佐世保市教育委員会― 一九八四
- ⑤ 織笠 昭「西海技法の研究」『東海大学紀要文学部』54 東海大学文学部 一九九〇
- ⑥ 前掲註(1)
- ⑦ 川道 寛「日本列島最西端の細石器文化」『地域と文化の考古学』1 明治大学考古学研究室 二〇〇五
- ⑧ 前掲註(3)
- ⑨ 芹澤長介「石器時代の日本」築地書館 一九六〇
- ⑩ 前掲註(1)
- ⑪ 栗島義明「福井4層」『利根川』二四 利根川同人会 一九九三
- ⑫ 綿貫俊一「長者久保・神子柴分化並行段階の九州」『古文化談叢』九州古文化研究会 一九九二
- ⑬ 前掲註(7)
- ⑭ 横田義章「いわゆる「神子柴型石斧」の資料」『研究論集』7 九州歴史資料館 一九八一

第三節 大村湾の形成と海洋適応(縄文早期末〜後期)

一 縄文海進と大村湾の形成

今から約二〇〇〇年前の最寒冷期には、海面が現在よりも一二〇ほど低下し、陸域が拡大した時期であった。当然、この時期には大村湾も陸化し、南北に河川が流れていたことが分かっている。その後気温が上昇するとともに海面も上昇するが、大村湾に海水が流入し始めたのはおよそ九〇〇〇年前頃で、約七〇〇〇年前には現在の広がりをもつ海域になったとさ

れている(1)。この大村湾の形成は、それまでこの地で生活してきた縄文人の生活様式や生業に大きな影響を与えたことは想像に難くない。

図2-7は、大村湾沿岸における縄文時代早期遺跡の分布図である。調査事例に基づき、早期前葉(円筒形条痕文土器期)、早期中葉(押型文土器期)と早期後葉(末葉(塞ノ神式)条痕文土器期)に分けて示している。早期前葉(中葉の遺跡は、標高二〇〇〜三〇0メートル程度の丘陵上に展開する遺跡が多い。東彼杵町松山A遺跡では、早期前葉の石鏃の石材は黒曜石が主体であるが、色調に基づく組成比では、黒色黒曜石四三・一%、灰青色黒曜石が二二・四%、灰白色黒曜石二二・七%、乳白色黒曜石が四・五%となっており、灰青色や灰白色の黒曜石の割合が比較的高いことが指摘されている(2)。これらの石材の一部は、針尾島産黒曜石と考えられ、この時期針尾島産の黒曜石が一定程度利用されていたことを示している。一方、松浦市鷹島海底遺跡では、海底マイナス二五メートルの約八五〇〇年前の堆積層から押型文土器が出土し、この時期の海面下に没した遺跡の存在が明らかとなった。これらのことから、早期前葉から中葉には、現在確認できる丘陵上の遺跡以外にも、針尾島の黒曜石原産地にアクセスする遺跡群が大村湾内に点在していたが、九〇〇〇年前以降の海水の浸入によって水没し、現在の大村湾海底に眠っている可能性を考えておくべきだろう。

二 沿岸部への進出

大村湾周辺で遺跡群の低地部への進出が明確になるのは、縄文時代早期末の塞ノ神式(条痕文土器段階)である。この時期の遺構は、大村市玖島城跡で検出されている(3)。湧水点付近に土坑を掘削しマテバシイなどの堅果類を貯蔵した低湿地型貯蔵穴と呼ばれる施設である。これは、秋に収穫した堅果類を水漬けて保管する施設で、一定期間の定住を意図した施設でもある。早期末以降、前期から晩期にかけて、大村湾沿岸では低湿地型貯蔵穴が断続的に検出されることから、この時期以降、大村湾沿岸を拠点として一定程度定住する生活様式が定着したものと考えられる。

ところで、縄文人が大村湾沿岸に定着し始めた時期、大村湾の海水準はどの程度の高さだったのだろうか。実は、この点



圖2-7 縄文早期遺跡分布圖(大村灣岸)

についても低湿地型貯蔵穴の分析から推測できる。低湿地型貯蔵穴は淡水に貯蔵して保存する施設であるため、貯蔵穴が機能している時期には海面はより低位であったはずである。このように考えると、大村湾沿岸に定着し始めた早期末の低湿地型貯蔵穴床面標高はマイナス二〜一メートルで、現在の海水準よりもやや低位だった時期に沿岸部に進出したことが分かる(4) (図2-8)。実は近年、海抜マイナス一〜三メートルから縄文時代早期末の貝塚や低湿地型貯蔵穴、墓地などが検出された佐賀県佐賀市の東名遺跡(5)、同じく海抜下で縄文時代早期末の貝層を検出した福岡県福岡市浜の町貝塚(6)など、海抜下での縄文時代早期末葉の遺跡の発見が九州で相次いでいる。このことは、大村湾

についても低湿地型貯蔵穴の分析から推測できる。低湿地型貯蔵穴は淡水に貯蔵して保存する施設であるため、貯蔵穴が機能している時期には海面はより低位であったはずである。このように考えると、大村湾沿岸に定着し始めた早期末の低

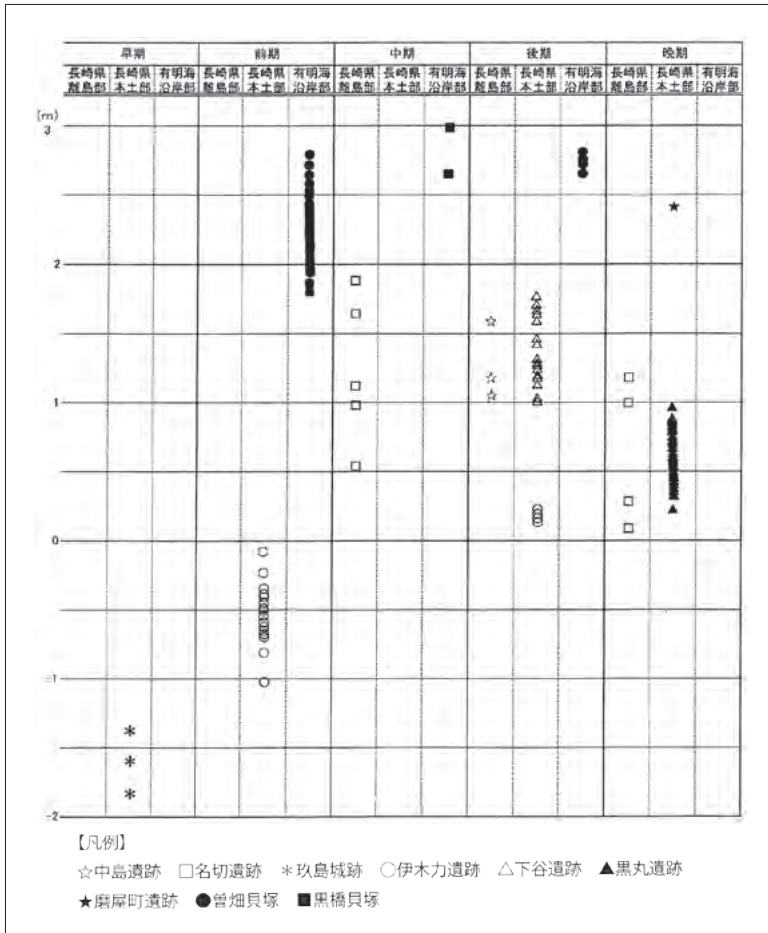


図2-8 低湿地型貯蔵穴の床面標高の推移

(長岡・中尾2009から抜粋)

沿岸だけでなく、九州北岸周辺で、海水面がマイナス二メートル程度の段階で、沿岸部に定着しつつあったことを示している。また、平戸市つくめのはな遺跡では、この時期の石銚が大量に出土し、平戸瀬戸でのクジラ漁の可能性が指摘されている^⑦。早期末ごろには、沿岸部への定着に伴って、海域での生業活動の試行錯誤が進んでいたことがうかがえる^⑧。

三 漁労活動の開始

今から約六〇〇〇年前頃の縄文時代前期は最温暖期となり、海水準が現在とほぼ同じか、やや上位にあったと考えられている。大村湾では約七〇〇〇年前には現在の海域が形成されたと推測されているが^⑨、これを機に新たな生業活動が付け加えられる。漁労活動である。

大村湾の南端に位置する諫早市伊木力遺跡では、石錘が大量に出土している。これは扁平な円礫の両端を打ち欠いて挟りをつくった石器で、漁網の錘であったと推測される。伊木力遺跡では一〇〇グラム前後の一般的な石錘のほか、一キログラムを優に超える超大型石錘も大量に出土していて、舟の碇としての機能も想定されている^⑩（写真2-2）。後述するとおり、大村湾沿岸では貝塚の形成が低調であるため、どのような魚を捕獲していた



写真2-2 超大型石錘（伊木力遺跡）
（諫早市教育委員会 多良見町文化財調査報告書第7集より）

のかなど、具体的な活動内容には不明な点は多いものの、海へのアプローチが明確な遺物が出土し始めるのはこの時期以降であり、大村湾への本格的な適応が図られることになる。

◆ 滑石混入土器の展開

縄文時代前期後半の土器である曾畑式土器は、丸底でボール状の器形を呈する器面全体に幾何学文様を描く特徴的な土器である。特に、底部まで施文する手法は、国内の他地域や他の時期と比較しても明らかに異質であり、韓半島に展開する櫛目文土器との関連性も指摘されている。この曾畑式土器は、型式学的な研究により、九州西北部（長崎県西部）で成立した土器であり、その後九州一円から沖縄本島まで広く分布することが明らかとなっている⁽¹⁾。

古式の曾畑式土器は、胎土に滑石を大量に混入する点が特徴で、器面に独特の光沢を有している^(写真2-3)。滑石は限られた地質環境でのみ採取可能であり、長崎県西部では西彼杵半島の変成岩地帯が最大の産地であった。滑石を混入する曾畑式土器は、大村市玖島城跡や諫早市伊木力遺跡など、大村湾沿岸でも大量に出土している⁽²⁾。また、長崎県内では、曾畑式土器に限らず、その後も船元・春日式系土器（中期前半）、並木式・阿高式系土器（中期末～後期初頭）の土器など、断続的ではあるものの滑石混入土器の伝統が顕著である。そのほか、前述した石錘の石材は、大村湾沿岸ではそのほとんどが結晶片岩と呼ばれる変成岩である。更に、縄文時代前期以降晩期にかけて、九州北岸から西岸地域では、蛇紋岩と呼ぶ変成岩が磨製石斧の石材として利用されるが、蛇紋岩は結晶片岩とともに西彼杵半島の変成岩地帯で採取可能であり、この地域が縄文時代の重要な石材原産地の一つと目されるのである。

このように、大村湾の形成以降、西彼杵半島産の滑石や結晶片岩、蛇紋岩の流通と、これを介した人的交流が活発になったことは間違いない。大村湾沿岸での西彼杵半島との往來の実態は、大村湾を介した海上の往來であったと推測されるが、それを可能にしたのは丸木舟であった。実際に、諫早市伊木力遺跡からは、縄文時代前期中葉のセンダン製丸木舟の一部が見つかっている^(写真2-4)。舟による物資運搬の利点は、舟の大きさや機能に左右されるものの、徒歩に比べて、一度



写真2-4 丸木舟出土状況 (伊木力遺跡)
 (諫早市教育委員会 多良見町文化財調査報告書第7集より)



写真2-3 管畑式土器 上段:伊木力遺跡 下段:玖島城跡
 伊木力遺跡(上) 諫早市教育委員会 多良見町文化財調査報告書第7集より
 玖島城跡(下) 長崎県教育委員会 長崎県文化財調査報告書第167集より

をはじめ西彼杵半島から石材等の必要物資を調達し、更には周辺地域へと供給していたものと推測される。縄文人にとって、大村湾は地域と地域を分断する障壁ではなかった。彼らは、丸木舟を用いることで地域と地域をつなぐ交易路として利用するとともに、漁労活動を通して日々の糧を得る場に変えることで、見事に適応を遂げたのである。

五 生業

縄文時代の生業は、狩猟・漁労・採集活動が主要な三本柱で、季節によって変動する周囲

に大量の物資を運搬できる点にある。丸木舟で波穏やかな大村湾を往来し、滑石や蛇紋岩

の自然環境を網羅的に利用し、貯蔵することにより、一定期間の定住生活を実現していた。大村湾岸地域におけるこれらの具体例を紹介したい。

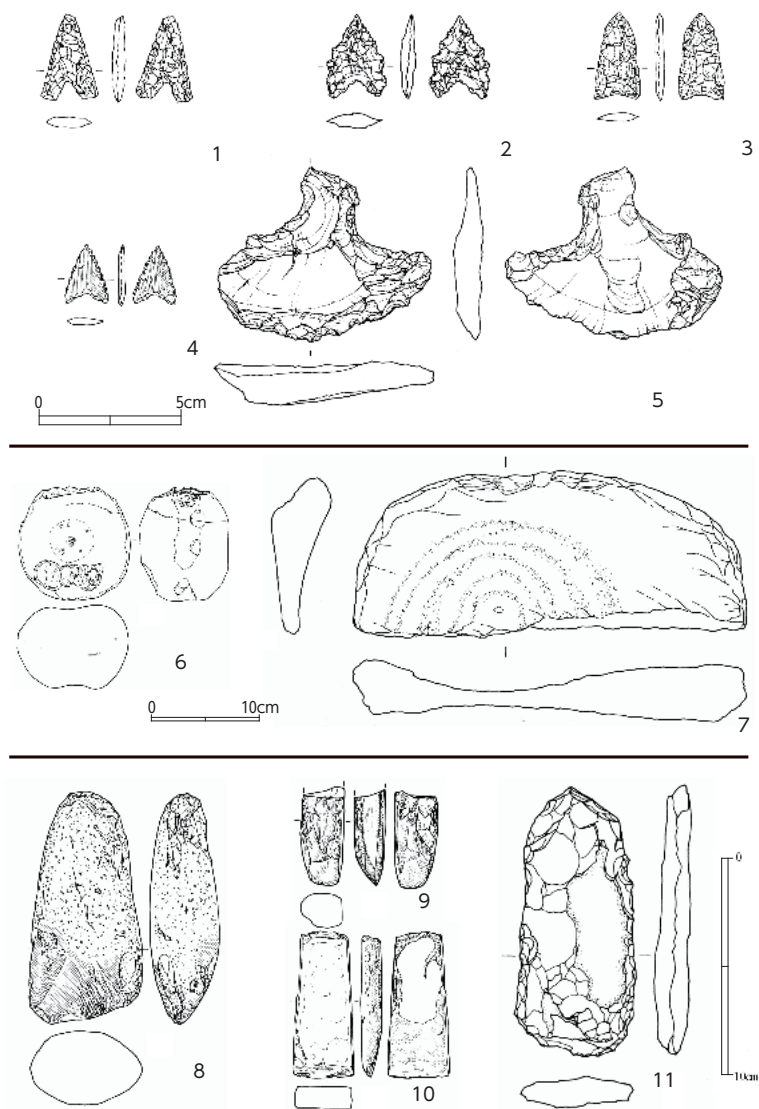
狩猟具の代表格は、石鏃である。森林性のニホンシカやイノシシを主とする中小型動物の捕獲に威力を発揮した弓矢の鏃で、黒曜石製のほか、安山岩製や玄武岩製もある。長さはおよそ三センチ未満である。また、捕獲した動物を解体するスクレイパーや石匙なども一緒に出土することが多い。

漁労具としては石錘がある。通常一〇〇〜三〇〇グラム程度で、漁網の錘と推測されているが、諫早市伊木力遺跡では一キロを越える超大型の石錘が出土しており、丸木舟の出土と併せて、碇石の可能性も指摘されている。また、大村市内で出土する石錘は、大村湾対岸の西彼杵半島産の結晶片岩製が多いのも特徴である。諫早市伊木力遺跡で出土した丸木舟はセリダン製で、全体にフナクイムシによる腐食が進んでいたものの、船底の部分が残存していた。現存長六・五メートル、現存最大幅七六センチメートル、厚さ二・五〜五・五センチメートルで、縄文時代としては大型に属する。

植物加工具の代表は、磨石や石皿である。これらは縄文時代に主食であったマテバシイなどの堅果類を粉砕・製粉する道具と考えられる。また、石皿は大型で持ち運びに不便であることから、遺跡からの出土の有無や多寡により、定住化の指標の一つとみなされ、縄文時代の生業や生活様式を特徴づける遺物の一つである。

このほか、工具類として、木材の伐採、加工等に使われた磨製石斧が出土している。伊木力遺跡では伐採斧と加工斧（ノミ状石斧）に機能分化が進んでいるが、加工斧については丸木舟製作と関連付けて理解されている。いずれもほとんどが蛇紋岩製で、西彼杵半島が産地と考えられる。

このような狩猟具（石鏃）、漁労具（石錘）、植物加工具（磨石類）、工具（磨製石斧・スクレイパー類）は、割合の若干の変動はあるものの、大村湾岸では縄文時代前期以降一貫して組成される道具である（図2-9）。一方で、縄文時代後期後半〜晩期前半にかけて、扁平打製石斧と呼ばれる土掘り具（耕作具）が大量に出土しており、後に述べる遺跡群の動態と併せて、新たな生業活動の展開を迎えることになる。



1～4：石鎌 5：石匙 6：磨石 7：石皿

8～10：磨製石斧 11：扁平打製石斧

【1・4：松山A 2・5～10：伊木力 3・11：黒丸】

図2-9 縄文時代の道具

六 住まごころ

■一 竪穴住居跡

縄文時代は定住性が高まり、恒常的な施設が作られた。その代表が竪穴住居跡である。長崎県内での縄文時代の竪穴住居跡の検出事例は二〇〇八年の段階で六遺跡三七基である。うち、二九基は島原市小原下遺跡で検出されたもので、これを除くとわずか八例にすぎず、九州内でも非常に少ない⁽¹³⁾。このうち、大村湾沿岸での竪穴住居跡の検出例は黒丸遺跡と嶽ノ下A遺跡の事例のみである。これらは後期末から晩期の事例であるが、いずれも円形となる。また、黒丸遺跡は竪穴住居に関連するとみられる石囲い炉が検出されている。

■二 低湿地型貯蔵穴

堅果類を貯蔵する施設として、低湿地型貯蔵穴がある。特に、大村湾沿岸では、早期末の玖島城跡に始まり、前期・後期の伊木力遺跡、弥生時代早期の黒丸遺跡と断続的に見つかっていて、縄文時代から弥生時代初期にかけて普遍的な施設であったことがうかがえる^(写真2-5)。福岡県久留米市正福寺遺跡や、佐賀県佐賀市東名遺跡、大分県大分市横尾貝塚など、最近明らかになった良好な低湿地遺跡の調査成果によれば、低湿地型貯蔵穴は、地下水位の高い低地に土壙を掘削し、堅果類を編み籠に入れて土壙内に水付けて貯蔵し、木蓋をして石で押さえる構造であったと考えられる。諫早市伊木力遺跡では、貯蔵穴内部から編み籠の一部が出土したほか、黒丸遺跡では木蓋の一部や礫が土壙内に落ち込んだ状態で見つかっている。また、黒丸遺跡からは堅果類を土壙内から掬い取る木製容器が出土している。

■三 集石遺構

集石遺構は土坑内に礫を詰め込んだ遺構で、焼礫を含む場合があることから、蒸し料理のような調理施設と考えられている。縄文時代早期の遺跡から検出される事例が多く、大村湾沿岸では、東彼杵町松山A遺跡や、諫早市鷹野遺跡⁽¹⁴⁾などで見つかっている。

■四 墓地

縄文時代の墓は、土壙墓が主体であったと考えられるが、人骨の遺存が見込まない酸性土壌では通常の土壙との識別が困難であり、検出事例は多くない。ただし、後期後半以降に深鉢土器を埋設した埋甕と呼ばれる墓が盛行するが、大村湾沿岸でも大村市黒丸遺跡や、諫早市下峰原遺跡(15)、西海市ケイマンゴ遺跡

(16)などで出土している。埋甕は小児用の墓とする説もあったが、焼骨が検出される事例の存在から、火葬墓である可能性が指摘されている(17)。



写真2-5 低湿地型貯蔵穴(黒丸遺跡)

七 西北九州型漁労文化の盛衰と大村湾岸遺跡群

九州北岸から長崎県西岸及び鳥嶼部にかけての西北九州沿岸部では、縄文時代前期～後期にかけて、結合式釣針や石鈎、離頭鈎などに代表される特徴的な漁労具を用いてサメ・ブリ・マグロなどの回遊魚を捕獲する外洋性漁労が成立し、漁場を同じくする韓半島南岸地域との交流が行われていたことが論じられてきた(18)。最近の研究では、西北九州地域の中でも漁労活動に地域差や時期差があり、外洋性漁労の成立は縄文時代後期前葉～中葉に限られることが明らかになっている(19)。縄文時代後期におけるこのような沿岸部での活動と、大村湾沿岸地域での活動内容を比較してみよう。

図2-10上段は縄文時代後期前葉及び中葉における遺跡の分布図である。この時期、長崎県内では、東シナ海沿岸の本土部及び鳥嶼部で貝塚の形成が活発となる。貝塚はスガイやオオコシダカガンガラといった岩礁性巻貝を主体とし、サメや大型のマダイ・ブダイ・ブリといった外洋性回遊魚や岩礁性魚類が伴う。また、結合式釣針や離頭鈎といった骨角器が共存する

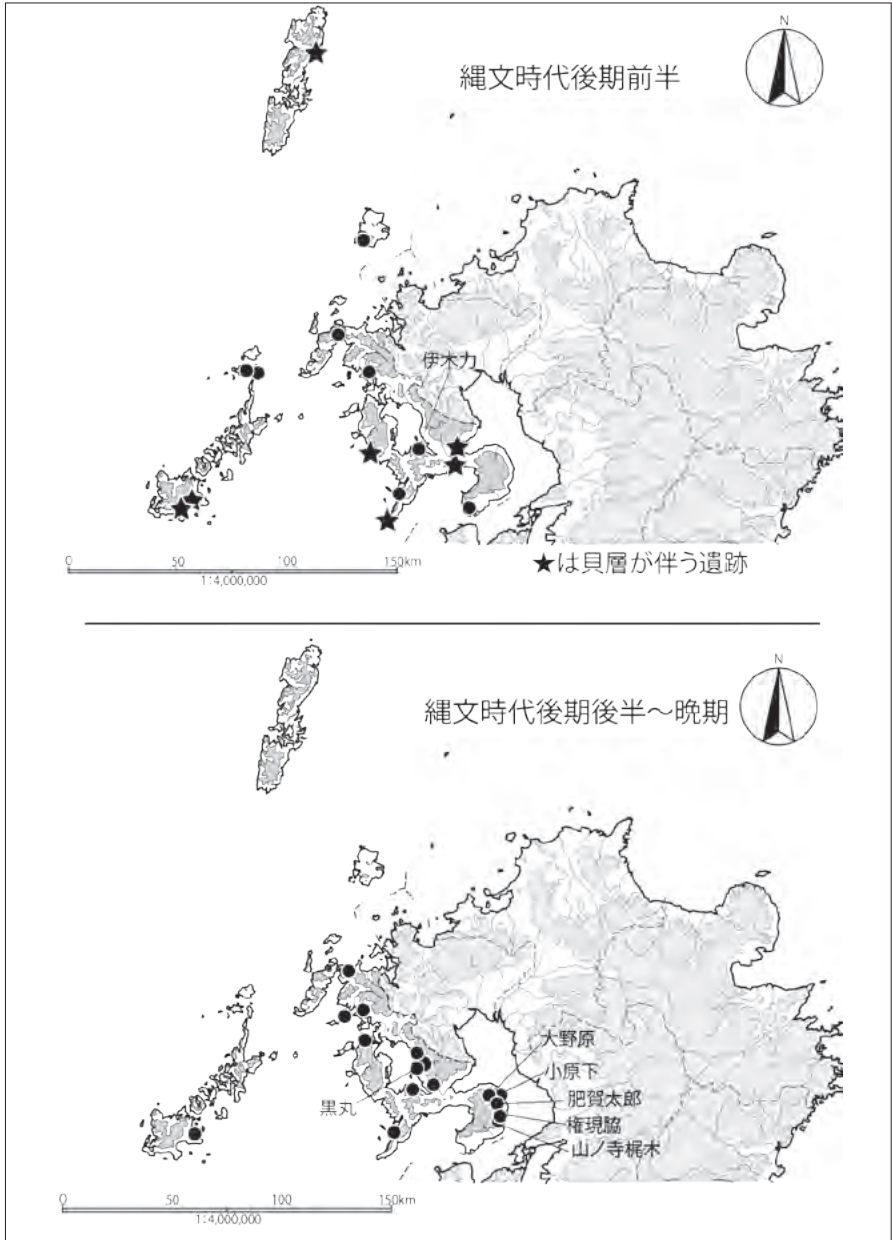


図2-10 縄文時代後期～晩期主要遺跡分布図(長崎県)

ことが多く、外洋性漁労の存在を示している。また、貝塚が伴わない遺跡も東シナ海沿岸部に多く展開し、石器組成が豊富で低湿地型貯蔵穴が伴う例もあることから、この時期には沿岸部を拠点として漁労と採集を支柱とする生業活動が活発になったと考えることができる。

同じ頃、大村湾沿岸では、貝塚の形成は低調であり、遺跡の存在そのものも東シナ海沿岸部と比較すると少ない。貝塚の形成が低調である点は、縄文時代後期に限らず大村湾沿岸の共通した特徴である。これは、干満の差が非常に少ない大村湾の特徴が、縄文人の好む貝類の生育に影響を及ぼした可能性や、潮干狩りを基本とした縄文時代の貝類採集活動にマッチしなかったことが考えられる。また、貝類採集以外の漁労活動については、諫早市伊木力遺跡で精巧な骨角製離頭鉗が出土しているものの、東シナ海沿岸の貝塚に比べると漁労具自体がごく少量にとどまっており、大村湾を往来する物資の運搬を除くと、大村湾を舞台にした生業活動は相対的に低調であった可能性が高い。

一方、後期後半以降になると、様相は一変する(図2-10下段)。後期後葉には、東シナ海沿岸部での貝塚形成が断絶し、沿岸部での遺跡そのものが非常に少なくなるとともに、漁労具の出土が皆無になる。同時に、後期中葉まで遺跡分布が希薄だった島原半島内陸部に遺跡が濃密に分布するようになる。最近調査が行われた島原市小原下遺跡は、この時期の代表的な遺跡であるが、火山灰台地上で堅穴住居跡四三基、土壙二九基、巨大な廃棄土壙と考えられる土器溜りなどを検出し、長崎県で初めて発見された縄文時代の大規模な集落遺跡であることが判明した(20)。住居跡だけでなく、大量かつ多様な土器や石器群の出土は、一定程度の人口の存在を示唆するもので、この時期に台地への集住が進んだことを示している。実は、大村湾沿岸でも、島原半島にやや遅れるものの、後期末以降、黒丸遺跡をはじめとする大規模遺跡の出現が顕著になる。この現象の背景には、縄文時代後期後葉に一時的な寒冷化が起り、砂丘の形成や内湾の埋積など、沿岸部環境に変化が生じて生活が困難になったことが推測されている(21)。

このように、縄文時代後期から晩期にかけての、東シナ海沿岸部と大村湾沿岸部との遺跡数や遺跡規模における反比例の関係は、後期後葉における気候の寒冷化を背景とした沿岸部環境の変化により、これまで依存してきた漁労活動を放棄

し、島原半島や大村湾沿岸の扇状地や台地上に集住する適応戦略を採用したことを反映している。
また、この適応戦略は、生業の変化を伴うものであった。後期末以降、大村湾沿岸で大規模に展開する黒丸遺跡を通して、その具体像を次節で素描してみよう。

(中尾篤志)

註

- (1) 松岡數充「大村湾」超閉鎖性海域「琴の海」の自然と環境△長崎新聞新書013▽ 長崎新聞社 二〇〇四
- (2) 安楽 勉「松山A遺跡」『九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書』長崎県文化財調査報告書第93集 長崎県教育委員会 一九八九
- (3) 長崎県教育委員会『玖島城跡』長崎県文化財調査報告書第167集 二〇〇二
- (4) 長岡信治・中尾篤志「ハイドロアイソスタシーと遺跡群」『縄文時代の考古学3 大地と森の中で』同成社 二〇〇九
- (5) 佐賀市教育委員会『東名遺跡群Ⅱ』佐賀市文化財調査報告書第40集 二〇〇九
- (6) 福岡市教育委員会「浜の町貝塚」『福岡市埋蔵文化財調査年報』vol.23 二〇〇九
- (7) 川道 寛「つぐめのはな遺跡のクジラ漁」『縄文時代の考古学5 食糧生産の技術』同成社 二〇〇七
前掲註(2)
- (8) 水ノ江和同「九州における縄文時代早期末葉の評価」『南の縄紋・地域文化論考 新東晃一代表還暦記念論文集』南九州縄文研究会・新東晃一代表還暦記念論文集刊行会 二〇〇九
前掲註(1)
- (9) 宝珍伸一郎「超大型礫石錘に関する二、三の考察」『伊木力遺跡』多良見町教育委員会・同志社大学考古学研究室 一九九〇
前掲註(3)
- (10) 水ノ江和同「曾畑式土器の出現—東アジアにおける先史時代の交流」『古代学研究』一一七 古代学研究会 一九八八
前掲註(3)
- (11) 多良見町教育委員会・同志社大学考古学研究室「伊木力遺跡」『多良見町文化財調査報告書第7集 一九九〇』長崎県教育委員会「伊木力遺跡Ⅱ」『長崎県文化財調査報告書第134集 一九九七』九州縄文研究会 二〇〇八
- (12) 中尾篤志「長崎県の縄文住居」『九州の縄文住居Ⅱ』第一八回九州縄文研究会熊本大会 九州縄文研究会 二〇〇八
- (13) 長崎県教育委員会『諫早中核工業団地造成に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書Ⅲ』長崎県文化財調査報告書第85集 一九八
- (14)

- (15) 諫早市埋蔵文化財調査協議会『下峰原遺跡 諫早西部団地開発事業に伴う発掘調査報告書』諫早市埋蔵物文化財調査報告書第2集 一九九八
- (16) 西海石油共同備蓄株式会社・長崎県教育委員会『ケイマンゴ―遺跡』長崎県文化財調査報告書第52集 一九八〇
- (17) 橋口達也『大形棺成立以前の甕棺の編年』九州歴史資料館研究論集17 九州歴史資料館 一九九二
- (18) 木村幾太郎『交易のはじまり』考古学による日本歴史10 対外交渉 雄山閣 一九九七
- (19) 甲元眞之『環東中国海の先史漁撈文化』『文学部論叢』第65号 熊本大学文学会 一九九九
- 山崎純男『西北九州漁撈文化の特性』『季刊考古学』第25号 雄山閣 一九八八
- 渡辺 誠『西北九州の縄文時代漁撈具』『列島の文化史』2 日本エニターズスクール出版部 一九八五
- 中尾篤志『九州地方の縄文時代漁撈具』『韓・日新石器時代の漁撈と海洋文化』第八回韓・日新石器時代行動学術大会発表資料集 韓国新石器学会・九州縄文研究会 二〇〇九
- 福田 一志『西北九州における縄文後期遺跡の特性―土器分布・石器を中心として―』『西海考古』創刊号 西海考古同人会 一九九九
- (20) 島原市教育委員会『小原下遺跡―株式会社東洋機工製作所工場建設に伴う発掘調査報告―』島原市文化財調査報告書第12集 二〇一一
- 島原市教育委員会『小原下遺跡Ⅱ―株式会社東洋機工製作所工場建設に伴う発掘調査報告―』島原市文化財調査報告書第13集 二〇一一
- (21) 甲元眞之『考古学研究と環境変化』『西海考古』第六号 西海考古同人会 二〇〇五

第四節 縄文農耕の可能性と周辺文化の流入（縄文時代晚期→弥生時代早期）

一 縄文農耕の研究史と最近の動向

縄文時代と弥生時代は、水稻耕作の開始によって画されるが、弥生時代以前に農耕が行なわれた可能性も古くから指摘されてきた。特に、扁平打製石斧を土掘り具と認定し、縄文時代中期の中部地方での畑作の可能性を指摘した藤森栄一

の縄文中期農耕論、同じく九州の縄文時代後晩期における焼畑の存在を指摘した賀川光夫などが著名であるが、確実な栽培植物が不明であったことから説得力を欠いていた¹⁾。

近年では、発掘調査時のウォーターフローテーションによる植物種子の検出例の増加や、レプリカ・セム法による土器の種子圧痕の検出事例の増加に伴い、縄文時代に遡る栽培植物の存在が確実視されている。特に、レプリカ・セム法は土器の圧痕として残された種子を型取りして電子顕微鏡で観察する手法で、遺跡から出土する植物種子がコンタミネーション(混入)の可能性を常に問題視されるのに比べて、時期比定が確実な点で注目を集めている。ただし、圧痕種子の同定手法について定まっていない部分もあり、一部の種実同定に関して慎重な意見もみられるものの²⁾、可能性があるものも含めると、弥生早期突帯文土器期を遡る栽培植物として、イネ・オオムギ・ダイズ・アズキなどが見つかつている。

これを受けて、縄文時代後晩期に韓半島からの影響下でイネの栽培が始まっていた可能性を指摘する意見は根強い。甲元眞之は日本列島を含む東北アジアの栽培植物の地理的・時間的分布を検討し、縄文時代後晩期に漁労民の交流を介してイネの栽培が韓半島南岸から九州に流入した可能性を指摘した³⁾。また、宮本一夫は韓半島と九州の打製収穫具や磨棒などを比較検討し、九州縄文後期初頭から中葉をアワ・キビ栽培の成熟園耕第一段階、後期後半〜晩期をイネが伴う成熟園耕第二段階として、韓半島からの栽培穀物の影響を考えた⁴⁾。最近では、韓半島から西日本一帯の打製石鍬(扁平打製石斧)の集成を行った幸泉満夫により、縄文早期から韓半島からの扁平打製石斧の流入があったことが指摘され、韓半島からの雑穀を含む栽培技術の移入が行われた可能性に言及している⁵⁾。韓半島からの栽培技術の波及に関してポイントになるのは、突帯文土器期を遡るイネ粃の存在の有無である。従来、縄文時代後期後葉のイネ粃圧痕とされた岡山県南溝手遺跡の土器は、弥生時代早期の土器であることが確認され、このほかに縄文後晩期の土器圧痕とされてきたものも、レプリカ法等による再調査の結果、イネの同定や土器片の時期比定について判断保留のものがほとんどとなった⁶⁾。また、コクゾウムシが穀物栽培の根拠とされたこともあったが、飼育実験の結果、穀物だけでなく堅果を食料として繁殖することが確認されたことから、コクゾウムシを穀物栽培の根拠とすることができなくなった⁷⁾。以上の成果により、突帯文土

器期を遡る確実なイネの物証はほぼなくなった。縄文時代後晩期における韓半島からのイネをふくむ雑穀栽培の可能性については、出土資料の評価も含めて議論が続いており、未だ仮説の域を出ていない。

一方、特に最近注目されるのが、ダイズ・アズキをはじめとするマメ類の栽培である。関東や中部地方の土器圧痕を調査した中山誠二によれば、関東や中部地方では、縄文時代前期から中期にかけて、栽培化されたアズキ・ダイズが検出されている^⑧。また、縄文時代後期後半には、九州でもより大型化したダイズの存在が明らかとなり^⑨、縄文時代前期～中期の東日本における扁平打製石斧を伴うダイズ・アズキの栽培技術が、後期後葉以降九州に波及し、同時期に韓半島から流入した雑穀栽培技術と融合した可能性が指摘されている^⑩。また、扁平打製石斧を耕作具とみなし、生業にしめる割合は低いものの、この時期に畑作が存在した可能性も指摘された。これらの成果は、ヤブツルアズキの栽培化が縄文時代に日本で達成され、独自の展開を見せた可能性を示唆しており、これまで栽培（農耕）の根源地を一方的に韓半島や大陸に求めていた研究動向の一部見直しを迫ることとなった。

このように、現状では栽培植物の構成やその系譜について議論の余地を残しており、今後も調査等の進展に応じて議論が続くと思われるが、少なくとも九州では、縄文時代後期後半以降、扁平打製石斧を用いた栽培活動が展開したことは、確実に証明されつつある。

なお、これまで紹介してきた栽培活動に関する評価としては、生業全体の中で主体とならず、従来の狩猟・漁労・採集活動を補助する形で付加された生業であったとする考えが強い。実際、九州の縄文時代後期後半以降において、有力者の出現を示す厚葬墓の出現といった根拠に乏しく、縄文時代における栽培活動が社会の複雑化を促した可能性は低い。そのため、縄文時代の栽培活動が、灌漑を伴う水稻耕作受容の技術的・精神的受皿となりえた可能性は指摘できても^⑪、縄文農耕の自立的発展の延長上で弥生時代における社会変化を捉えることは現状では困難である。

このような研究状況を踏まえてあらためて大村湾沿岸遺跡群の動向に目を向けると、縄文時代後期末の遺跡立地の変動の背景として、①低湿地型貯蔵穴に代表される従来の植物利用に加えて、②縄文時代後晩期にかけて東日本や韓半島か

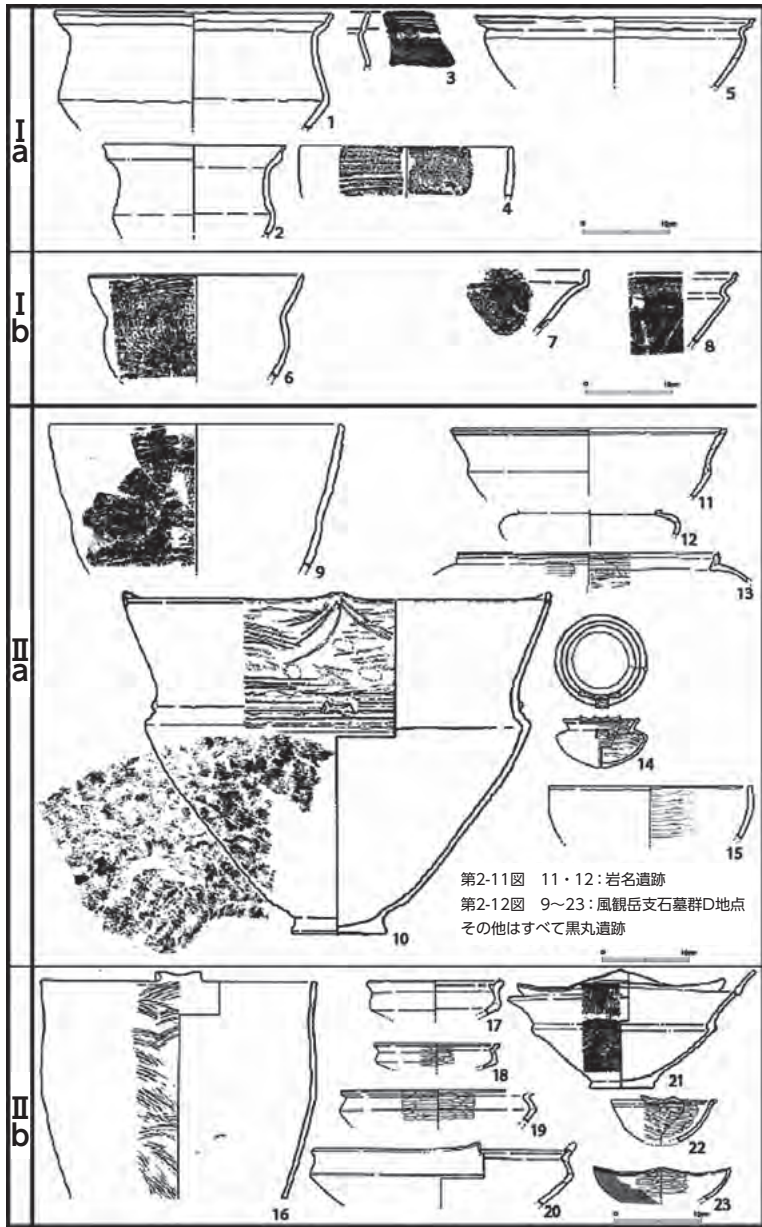


図2-11 大村湾沿岸の土器編年①(縄文晩期～弥生前期)

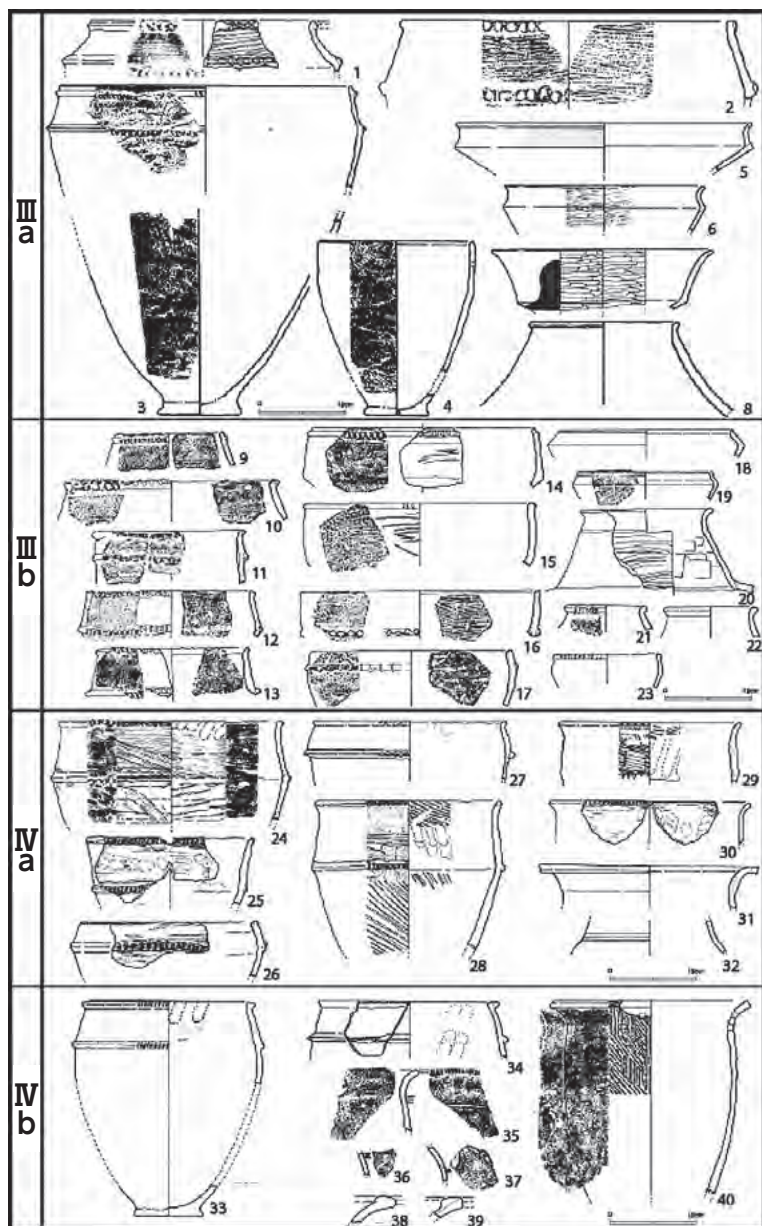


図2-12 大村湾沿岸の土器編年② (縄文晩期～弥生前期)

ら伝わった可能性のあるアズキ・ダイズ・イネ・オオムギ等の栽培技術、③弥生時代早期以降に韓半島から流入するイネの水稻耕作技術、及び関連する土器、石器、墓制、が複雑に錯綜していた状況が推測できる。このあたりの事情を大村湾沿岸遺跡群で復元するには、考古資料の丁寧な分析が必要とされるが、その大前提となるのが土器編年である。

二 土器編年と地域間関係

長崎県内における縄文晩期から弥生時代にかけての土器編年は、一九五〇年代に島原半島で調査された山ノ寺遺跡や原山遺跡での調査成果に基づく「山ノ寺式」、「原山式」の設定以降ほとんど進展が見られず、玄界灘沿岸や有明海沿岸など周辺地域との比較研究を困難にしている。近年では、北部九州でも縄文時代晩期～弥生時代早期にかけての土器編年研究の進展が認められ¹²、大村湾沿岸地域でも黒丸遺跡出土資料に基づく縄文時代晩期土器編年案が提示されている¹³。これらの成果を参照しつつ、これまで調査された環大村湾沿岸地域出土土器を検討すると、該期の土器は大まかにⅠ期～Ⅳ期に分けられる^{図2-11}、^{図2-12}。

Ⅰ期（晩期前葉）は、タガ状口縁の深鉢と黒色磨研の浅鉢で構成される土器群で、肥後の古閑式併行の土器である。Ⅱ期は、屈曲形と砲弾形の粗製深鉢と胴部が張る精製浅鉢などで構成される黒川式併行土器群（晩期後半）である。続くⅢ期は突帯文土器群であるが、縄文時代晩期末～弥生時代移行期の土器群であり、この細分と板付式系土器群との関係が、それぞれの地域における弥生時代への移行状況を物語る要素として、各地で議論が続けられている。大村湾周辺の突帯文土器は、比較的出土事例が豊富な島原半島の事例等も参照すると、更なる細分の可能性を残しつつも、現時点ではおおよそ二時期に分けることができる。前半（Ⅲa期）は屈曲二条突帯深鉢、「く」の字口縁浅鉢、方形波状口縁浅鉢、壺などで構成され、突帯の刻みは指や棒状工具が主体となる土器群である。後半（Ⅲb期）は方形波状口縁浅鉢が消滅し、屈曲して突帯を張り付ける鉢形土器が加わる。屈曲二条突帯の口縁部突帯は口唇部に接するものが多くなり、刻みは棒状工具やヘラによる施文が主体で、屈曲部がゆるやかになる。また、壺の口縁部は外反するもの、端部を肥厚するもの、外反して沈

線を引くものなどがある。Ⅳ期は板付式系土器群が組成に加わる時期で、板付式系土器と突帯文式系土器が共伴する前半(Ⅳa期)と、板付式系土器が主体で弥生化した亀の甲タイプの突帯文式系土器が加わる後半(Ⅳb期)に細分される。Ⅳa期は逆くの字口縁浅鉢がほぼ消滅し、板付甕が組成に加わるとともに、板付甕の影響を受けて口縁端部が外反した屈曲一条突帯甕など、両者の折衷土器を認めることができる。壺は夜白式系のものに加えて、胴部と頸部の境が明瞭で沈線等で区画し、口縁部が肥厚する板付式系の壺も加わる。Ⅳb期は、屈曲一条突帯文系の深鉢は屈曲部がなくなり、口縁端部突帯は端部に接して平坦面を形成し、刻みはへらで浅く粗に施文するようになり、このほか板付式系の甕や壺、高坏で構成される。

他地域との併行関係は、若干前後する可能性はあるものの、Ⅰ期が古閑式併行(縄文時代晩期前半)、Ⅱ期が黒川式併行(縄文時代晩期後半)、Ⅲa期が山ノ寺式・夜白式期(弥生時代早期)、Ⅲb期が板付Ⅰ式期(弥生時代前期前半)、Ⅳ期が板付Ⅱ式期(弥生時代前期後半)に凡そ位置づけられる。

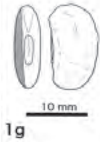
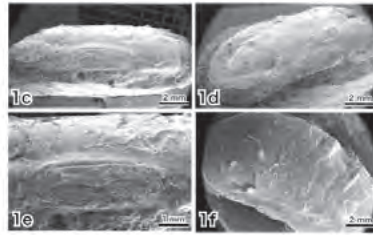
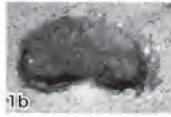
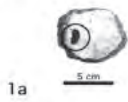
◆ 生業の変化

大村市黒丸遺跡におけるⅠ期(縄文時代晩期)～Ⅲ期(弥生時代前期前半)の石器組成は、一貫して扁平打製石斧と石鎌からなる。Ⅰ期以前の事例として、諫早市伊木力遺跡(縄文時代後晩期)の石器組成を比較すると、石錘・磨製石斧の減少と、石鎌、石皿、扁平打製石斧の増加が顕著であり、漁労活動の低下とともに、植物質食糧の利用にも変化が生じたことを推測させる(表2-1)。研究史で若干ふれたが、最近の研究では、九州の縄文時代後期後半以降、ダイズ・アズキ・イネ・オオムギなどの栽培の可能性が説かれ、扁平打製石斧の急激な増加はこれらの栽培と密接に関連した現象である可能性が指摘されている(14)。長崎県内でも、島原市大野原遺跡(縄文時代後期後葉)(仙波靖

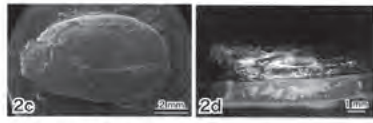
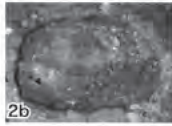
表2-1 縄文時代後期～晩期の石器組成

遺跡名	所在地	時期	狩猟具		植物加工具			加工具						
			石鎌	石錘	磨石 敲石	石皿	打製 石斧	磨製 石斧	削器 掻器	石匙	石錐	彫器	模形 石器	磁石
伊木力	諫早市	後期主体	19	32	18	0	9	54	159	8	7	9	3	3
肥前太郎	島原市	晩期後半主体	69	5	17	31	50	6	185	6	2	0	4	12

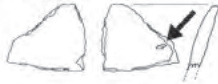
大野原遺跡



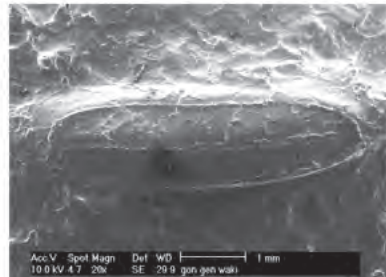
大野原遺跡



権現脇遺跡



3 a

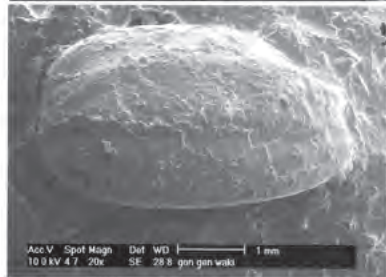


3 b

権現脇遺跡



4 a



4 b

1・2：ダイズ圧痕（小畑ほか 2007）、3：ダイズのヘソ圧痕（小畑・仙波 2006）

4：イネ圧痕（小畑・仙波 2006）

写真2-6 種子圧痕の土器附着位置とレプリカの走査顕微鏡像（島原半島の事例）

（大野原遺跡（上） 小畑ほか（2007）「土器圧痕からみた縄文時代後、晩期における九州のダイズ栽培」より）
（権現脇遺跡（下） 南島市教育委員会 深江町文化財調査報告書第2集より）

子・小畑知己(二〇〇八)「土器圧痕資料調査報告」、島原市肥賀太郎遺跡(Ⅱ期)(15)、南島原市権現脇遺跡(Ⅱ・Ⅲ期)(16)で、大量の扁平打製石斧とともに、ダイズ(大豆)の土器圧痕が検出され、権現脇遺跡では、Ⅲ期のイネの圧痕も検出されており(写真2-6)、同時期における大村湾沿岸での遺跡の大規模化や扁平打製石斧の増加も、同様の文脈で理解できる可能性は高い。

ただし、黒丸遺跡ではⅢb期の低湿地型貯蔵穴が併せて検出されていることから、従来の採集活動も健在であったことが分かる。

四 周辺地域からの影響

■ 一・東日本縄文文化の影響―石剣

東日本の精神文化の影響を推測させる遺物として注目されるのが、石剣である。石剣は東日本を中心に分布する呪術具であるが、縄文時代後期後半以降、土偶など他の精神文化遺物を伴って、変容しながらも九州まで波及することが明らかになっている(17)。黒丸遺跡のⅣb期の土壇内から出土した石剣は頁岩製で、櫃原型石剣に類似する。断面楕円形で側面に沈線を刻み、正面に八〜九本単位の弧状沈線で文様を描いている。出土遺構は弥生時代前期後半に属するが、このような文様を持つ石剣の事例は、周辺地域でも縄文時代晩期を下る事例はない。出土地点は河川の氾濫原と考えられ、黒川式併行期の土器

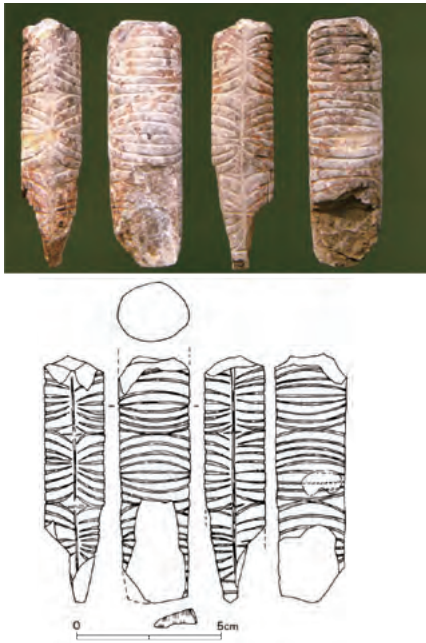


図2-13 石剣(黒丸遺跡)
(長崎県教育委員会 長崎県文化財調査報告書第204集より)

も出土していることから、晩期包含層中からの混入の可能性も考えておく必要があるか(図2-13)。

■二 韓半島からの影響

孔列文土器

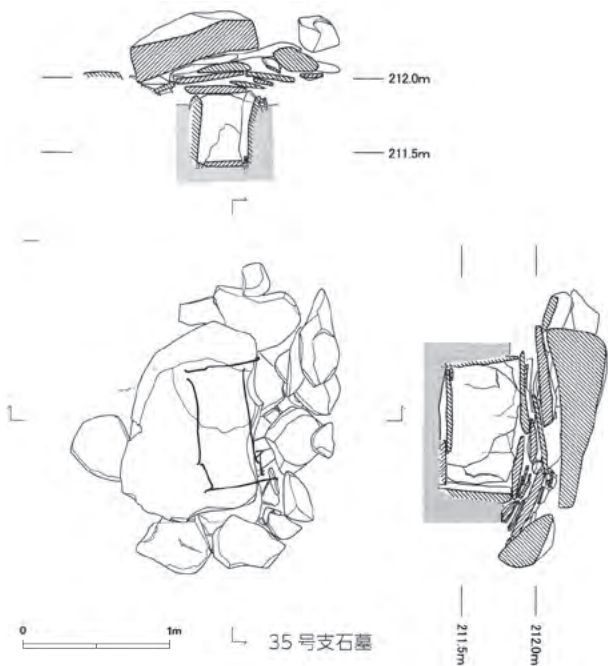
大村市野田の久保遺跡で、Ⅲb～Ⅳa期の土器とともに出土している¹⁸。直口縁の深鉢口縁部片で、口縁直下に大きめの穴が一行に並んでいる。穿孔は外側から内側に向けて開いており、口唇部までの距離が短く、各孔の間隔も詰まっている。韓半島の孔列文土器の研究によれば、(i)孔列の孔の径は大きなものから小さなものへ、(ii)孔同士の距離は広いものから狭いものへ、(iii)孔から口唇部までの距離は短いものから長いものへ、(iv)穿孔方向は内↓外から外↓内へと変化することが明らかになっている¹⁹。これらの特徴に照らせば、野田の久保遺跡出土例は、比較的新しい特徴を備えている。周辺の出土例では黒川式から突帯文段階(Ⅱ～Ⅲ期)に伴うことが明らかとなっており、野田の久保遺跡の時期及び孔列文土器の特徴とも符合する(図2-14)。

日本国内では、北部九州から九州西岸を経て南九州でも出土するほか、最近では山陰など日本海沿岸での出土例も増えている孔列文土器であるが²⁰、韓半島の孔列文土器そのものが搬入される事例はごくまれで、縄文晩期土器そのものに、孔列文の意匠のみが加えられた事例がほとんどである。野田の久保遺跡出土例の場合、表面が磨滅しており詳しい観察は困難であるが、少なくとも胎土は突帯文段階の土器と差がない。恐らく、穿孔という可視的な情報のみが持ち込まれて縄文土器に反映された可能性が高く、この土器のみで人の移動を伴うような濃密な交流を想定することは難しい。しかし、長崎県内では唯一の孔列文土器の出土例であり、おなじ大村湾沿岸で韓半島系の埋葬習俗である風観岳支石墓が形成されていることから、これに伴って韓半島からの情報が間接的若しくは断片的に持ち込まれた可能性は否定できないであろう。

支石墓



図2-14 孔列文土器(野田の久保遺跡)



23号支石墓

图2-15 支石墓(風観岳支石墓群)

(諫早市教育委員会 諫早市文化財調査報告書第19集より)

支石墓とは、埋葬施設を地下に持ち、地上に巨大な石を配する特異な墓制であり、広く東北アジアに展開している。日本では基盤形の支石墓が主体であるが、その祖形は韓半島の同様の支石墓に求められ、日本における初期農耕の故地を探求する手段の一つとして、古くから研究の俎上（そじょう）に乗せられてきた。

諫早市風観岳支石墓は、大村湾を見下ろす標高二四〇（メートル）以前の丘陵状に立地する②。発掘調査により一〇〇基を超える支石墓が検出されている。六つの支群で構成され、内部主体は石棺と土壙である。副葬品として小壺が伴うものがある。このような特徴は、近隣の大野台支石墓（鹿町町）や狸山支石墓（佐々町）、小川内支石墓（同）、原山支石墓（南島原市北有馬町）でも共通しており、長崎県本土部での特徴である②。

支石墓の系譜については、壱岐・対馬經由で玄界灘沿岸に到達したとする説③と、済州島經由で五島列島に到達したとする説④があったが、支石墓の諸属性や副葬品の特徴を分析した最近の研究では、韓半島南江流域を故地とし、石槨に木棺を据える地下施設を有し、磨製石剣や磨製石鏃、丹塗り壺、玉類を副葬する支石墓を祖形として、まず玄界灘沿岸地域に至り、その後地下施設の属性や副葬品の構成が変容しつつ、西北九州や佐賀平野へと二次的に波及したことが明らかにされている⑤。風観岳支石墓は、二次的とはいえ韓半島からの影響が間接的に波及したことを示すものである②-15。

五 大村湾岸遺跡群の特色

このように、気候の寒冷化に端を発した縄文時代後期末に始まる大村湾沿岸での遺跡群の立地変動は、生業の変化に留まらず、その後墓制や土器、精神文化の変化と連動するものであった。また、変化を促した要素は、大村湾沿岸という狭い範囲に留まらず、東日本や韓半島と幅広い地域からの影響によるものであった。これは、後期後葉の黒色磨研土器様式や晩期後葉（弥生時代早期）の突帯文土器様式といった、東海以西に広く展開する広域土器様式文化圏が成立したと無関係ではない。なぜなら、広域な土器様式文化圏の成立の背景には、地域間での情報の動き、人の動きの活性化が想定でき、遠隔地の情報が伝わる素地となったと考えられるからである。ほぼ同時期に、支石墓や孔列文土器にみるように、

表2-2 縄文時代晩期～弥生時代前期の遺構・遺物(大村湾沿岸)

時期/特徴	細分	遺跡・地点	特徴的な遺構	特徴的な遺物	併行関係		
縄文時代晩期	I期	a	黒丸(市30集)			古関式	
		b	黒丸(県132集) 2b・2c層・住居跡 黒丸(市20集) KOC615-2 黒丸(市24集) KOC26・KOC29・ KOE21 葛城(県98集)	住居跡 (県132集)	打製石斧(KOC29・KOC615-2)		
	II期	a	岩名(市24集) 黒丸(市20集)KOB7 黒丸(県201集)		打製石斧・石鏃(岩名)	黒川式 礫石原式	
		b	黒丸(市20集) KOA650-1・KOB2下層 黒丸(市24集) KOB28・KOB35 黒丸(県132集)2b層 黒丸(県201集) 風観岳(市24集)		打製石斧・石鏃・スクレイパー (風観岳) 打製石斧(KOB28・35)		
弥生時代早期	III期	刻目突帯文土器群	a	黒丸(県132集) IV区2層・2b層		山ノ寺式 夜臼式	
			b	風観岳D地点 (諫早市19集)	支石墓 (風観岳) 貯蔵穴 (県132集)	縄文系磨製石斧(風観岳) 紡錘車?未穿孔(風観岳)	打製石斧は普遍的に出土 原山式 板付I式
弥生時代前期	IV期	板付系土器群	a	黒丸(市20集) KOA31・KOA33・ KOB2中層 黒丸(県201集) 野田の久保(県98集)		孔列文土器(野田の久保) 打製石斧・2孔石包丁 (KOA31)	板付II式
			b	黒丸(県204集) 黒丸(市20集)KOA29 黒丸(市24集)KOB29		擦切石包丁(KOA32) (県204集I層) 韓半島無文土器(勒島式) (SK15) 石棒(SK31) 扁平片刃石斧・柱状片刃石斧 (県204集I層) 紡錘車?(県204集I層)	

韓半島から九州北岸・西岸地域を伝う情報や人の往来が確実に存在した。このような多方面からの情報の蓄積が、九州西岸の大村湾沿岸の遺跡群に影響を及ぼしたのであるが、新来の文化が在来の文化を駆逐するのではなく、あくまで在来の文化に付加される形で受容されている点にも留意する必要がある。在来の文化要素は、弥生時代前期まで色濃く残る突帯土器の影響や、堅果類の低湿地型貯蔵穴に見ることができらる。

このような縄文時代晩期～弥生時代前期の文化動態は、西日本各地で地域差を持って進化したことが明らかになりつつある。九州の西に位置する大村湾沿岸は、多方面からの新来の文化要素と伝統的な文化要素との相克や、外来文化要素の段階的な受容がつづに読み取れる地域であり、生業や墓制の一部に新来の文化を受容しつつも、土器や生業の一部には縄文系の要素が弥生時代まで色濃く残存する地域と捉えることができる（表2-2）。

（中尾篤志）

註

- (1) 藤森栄一「縄文農耕」学生社 一九七〇
- 賀川光夫「縄文時代の農耕」『考古学ジャーナル』一九六六年二月号 北隆館 ニューサイエンス社 一九九六
- (2) 中沢道彦「縄文農耕論をめぐって―栽培植物種子の検証を中心に―」『弥生時代の考古学5 食糧の獲得と生産』同成社 二〇〇九
- (3) 甲元眞之「環東中国海の先史漁撈文化」『文学部論叢』第65号 熊本大学文学会 一九九九
- (4) 宮本一夫「朝鮮半島新石器時代の農耕化と縄文農耕」『古代文化』第五五巻第七号 財団法人古代学協会 二〇〇三
宮本一夫「園耕と縄文農耕」『韓・白新石器時代の農耕問題』第六回韓・日新石器時代共同学術大会発表資料集 韓国新石器学会・九州縄文研究会 二〇〇五
- (5) 幸泉満夫「西日本初期扁平打製石鍬集成図譜」『山口県立博物館研究報告』第33号 二〇〇七
幸泉満夫「西日本における打製石鍬の出現」『地域・文化の考古学―下條信行先生退任記念論文集―』愛媛大学法文学部考古学研究室下條信行先生退任記念事業会 二〇〇八
- (6) 前掲註(2)

- (7) 小畑弘己『東北アジア古民族植物学と縄文農耕』同成社 二〇一一
- (8) 中山誠『植物考古学と日本の農耕の起源』同成社 二〇一〇
- (9) 小畑弘己・佐々木由香・仙波靖子「土器庄痕からみた縄文時代後・晩期における九州のダイズ栽培」『植生史研究』第一五巻第二号 日本植生史学会 二〇〇七
- (10) 小畑弘己「縄文時代におけるアズキ・ダイズの栽培について」『先史学・考古学論究V 甲元眞之先生退官記念』龍田考古会 二〇一〇
- (11) 宮本一夫「縄文農耕と縄文社会」『古代史の論点』1環境と食糧生産 小学館 二〇〇〇
- (12) 松本直子「伝統と変革に揺れる社会—東アジアにおける先史時代の交流」『古代学研究』第117号 古代学研究会 二〇〇二
- 水ノ江和同「北部九州の縄紋後・晩期土器—三万田式から刻目突帯文土器の直前まで—」『縄文時代』第8号 縄文時代文化研究会 一九九七
- (13) 宮地聡一郎「刻目突帯文土器圏の成立(上・下)」『考古学雑誌』第八八巻第一・二号 日本考古学会 二〇〇四
- 小南裕一「北部九州地域における弥生文化成立期前後の土器編年」『古文化談叢』第五二集 九州古文化研究会 二〇〇五
- 大野安生「黒丸遺跡沖田地区出土土器の検討—黒川式から山ノ寺式までの編年試案—」『西海考古』第四号 西海考古同人会 二〇〇一
- (14) 前掲註(10)
- (15) 山崎純男・片多雅樹「長崎県肥賀太郎遺跡における土器庄痕の検討」『肥賀太郎遺跡』長崎県文化財調査報告書第189集 長崎県教育委員会 二〇〇六
- (16) 小畑弘己・仙波靖子「レブリカ法による長崎県権現協遺跡出土土器庄痕の種子類の同定」『権現協遺跡—深江町文化財調査報告書第2集 深江町教育委員会 二〇〇六
- (17) 後藤信祐「縄文後晩期の石剣形石製品の研究(上)」『考古学研究』第三三巻第三号 考古学研究会 一九八六
- 後藤信祐「縄文後晩期の石剣形石製品の研究(下)」『考古学研究』第三三巻第四号 考古学研究会 一九八七
- (18) 長崎県教育委員会「野田の久保遺跡」『九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書VI』長崎県文化財調査報告書第98集 一九九〇
- (19) 片岡宏二「弥生時代渡来人と土器・青銅器」雄山閣 一九九九
- (20) 千 羨幸「西日本の孔列土器」『日本考古学』第二五号 日本考古学協会 二〇〇八

- (21) 諫早市教育委員会『風観岳支石墓群発掘調査報告書』諫早市文化財調査報告書第19集 二〇〇六
- (22) 鹿町町教育委員会『大野台遺跡―重要遺跡範囲確認報告』 一九八三
- 坂田邦洋「長崎県・小川内支石墓発掘調査報告」『古文化談叢』第五集 九州古文化研究会 一九七八
- 北有馬町教育委員会『国指定史跡原山支石墓群環境整備事業報告書』 一九八一
- (23) 森貞次郎「日本における初期の支石墓」『金載元博士回甲記念論叢』 金載元博士回甲記念論叢編輯委員会 韓国国立中央博物館 一九六九
- 甲元眞之「西北九州支石墓の一考察」『法文論叢』41 京都大学法学会 一九七八
- 岩崎二郎「北部九州における支石墓の出現と展開」『鏡山猛先生古稀記念 古文化論叢』 鏡山猛先生古稀記念論文集刊行会 一九八〇
- (24) 西谷 正「日朝原始墳墓の諸問題」『東アジア世界における日本古代史講座Ⅰ』 学生社 一九八〇
- 黒丸遺跡調査会『黒丸遺跡』長崎県大村市黒丸町所在黒丸遺跡の調査報告 一九八〇
- 本間元樹「支石墓と渡来人」『古文化論叢 児嶋隆人先生喜寿記念論集』 児嶋隆人先生喜寿記念事業会 一九九一
- (25) 端野晋平「支石墓伝播のプロセス―韓半島南端部・九州北部を中心として―」『日本考古学』第16号 日本考古学協会 二〇〇三